

ジョン・ウェスレーと聖餐 —ジョン・ウェスレーの信仰(18)—

深 町 正 信

1. 主の晩餐について

ジョン・ウェスレーが1784年に制定した「メソジスト宗教信条」は、また、「25 個条」とも呼ばれている。

その25 個条の第16 条には、「聖礼典のこと」について次のように定められている。「キリストによって制定された聖礼典は、キリスト者の告白によって徽章もしくは象徴であるばかりでなく、さらにそれらは、恩寵のたしかな徴であり、われらに対する神の善き意志である。それによって神はわれわれの中にかくれて働きたまい、神に対するわれわれの信仰を活かすのみでなく、強く、固くするのである。

われらの主キリストが福音の中に定め給うた聖礼典は2 つである。すなわち洗礼と主の晩餐とである。

通常、秘蹟と呼ばれる5 つのもの、すなわち堅信礼、懺悔式、聖餐、婚姻、終油等を、福音による聖礼典として数えることはできない。それらのあるものは、使徒たちの伝承を悪用したものであったり、又、あるものは聖書の中に許された生活の状態であるが、洗礼と聖餐のような性質のものではない。なぜなら、彼らは神によって定められた見ゆる徴もしくは儀式をもたないからである。聖礼典は眺めていたり、持ち歩くためにキリストによって制定されたものではなく、われわれがそれを正当に用うべきものである。またそれを正当にうける者のみに健全な結果と効力とをもつが、不当に受ける者は、聖パウロがコリン

トの信徒への手紙一第11章27節に言っているように罪に定められるであろう（従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります）。

更に、その18条には、「主の晩餐のこと」については次のようにある。

「主の晩餐は、キリスト者が相互の間にもつべき愛のしるしであるばかりでなく、さらにキリストの死によるわれわれの救いの礼典である。それを正当に、ふさわしく、信仰をもって受けるかぎりにおいて、われわれのさくパンはキリストの体にあずかることであり、同様に、祝してうくる杯がキリストの血にあずかることになるのである。

化体説、すなわちわれらの主の晩餐におけるパンと葡萄酒との実体が変わるといふ説は、聖書によって保障され得ないことであって、聖書の明らかな言葉にもとり、礼典の性質を放棄し、多くの迷信に機を与えてきている。

キリストの体は、聖餐式において、天的な霊的な仕方によってのみ与えられ、受けられ、食べられるべきものである。そして聖餐において、キリストの体が受けられ、食べられるための手段は信仰である。主の晩餐の礼典は、保留されたり、持ち歩かれたり、まつりあげられたり、礼拝されたりするためにキリストによって定められたのではない」とある。そして第19条には「パンと葡萄酒のこと」について次の如く定めている。

「主の杯を平信徒に与えることを拒んではならない。それは主の晩餐のパンも葡萄酒も、キリストの定めとして、すべてのキリスト者に等しく与えられるべきであるから」とある。

メソジスト宗教個条の中にあるこれら3つの個条に基づいて、ジョン・ウェスレーの聖餐についての考え方の特色を考察してみたいと思う。

ウェスレーの聖餐観についての資料としては、1745年に書かれた弟チャールズ・ウェスレーとの共編による『主の晩餐に関する賛美歌 (Hymn on the Lord's Supper)』がある。これによれば、ウェスレーにとり聖餐は、単に過去の想起というメモリアルな意味をこえて、何よりも「それによって聖餐の恵みが、すべての神の子らに注がれる最大の通路であり、われわれに与えられるす

べての手段の中のパラダイム」と呼ばれている。このような確信は、ウェスレーが、その生涯を通じて、常に規則的に聖餐にあずかっていたという事実を基礎とし、彼の体験的実証主義とも言うべき立場を明瞭ならしめている。

神ご自身が、聖霊において、現に力強く働かれていますので、パンと葡萄酒という外的手段を通して、私たちの魂のうちに本質的な益がもたらされるのであると考えている。

ジョン・ウェスレーは1732年2月28日に、母親スザンナの手紙に応えて、聖餐について次の如く記している。

「一事だけを考えても、聖礼典に関するあなたの判断に、私が賛成するのは十分です。すなわち、私たちは、キリストの人間性が聖礼典の中に臨在するのは許すことができません。これを許せば、「共在説」か「化体説」になりますから。しかしその時に、受けるに値する者に対してだけそうされるような仕方、キリストの神性が私たちと一つになってくださることを私は固く信じます。その場合の仕方に関しては、私には、それが全くの神秘であると言わざるを得ません」と記されています。

この手紙から判るように、ジョン・ウェスレーは、オックスフォード大学の時代、母親スザンナと同様に、聖礼典におけるキリストの臨在（**Real Preence**）を信じる高教会主義者（**High Church Man**）であった。しかしその臨在は化体説でもなく、又、共在説でもなかった。彼にとり、聖礼典は、単なるしるしでなく、キリストの神性の臨在を意味し理解されたのである。

化体説（**Transubstantiation**）とは、「聖別されたパンと葡萄酒とは、われらの主イエス・キリストの真実の身体と血なのである。もはやそれは、単にキリストの身体と血との礼典ではない。そして、その身体は感覚的に、すなわち、単に礼典としてではなく実際に、司祭の手によって扱われ、信者によって噛み砕かれるのである」という考え方である。ローマ・カトリック教会はこの立場である。

他方、「共在説」（**Consubstantiation**）は、いかなる箇所でも聖餐式が執行されても、キリストの身体は、真にそのパンと葡萄酒と共に存在することができる

という考え方である。プロテスタント教会のマルチン・ルターがこの共在説の立場をとっている。

同じプロテスタント教会でも、ツウイングリーは、キリストは天に在すとして聖餐を単にキリストの出来事の記念、又、しるし（標識）であると考えた。

ジョン・ウェスレーのパンと葡萄酒に於けるキリストの臨在（Real Presence）の考え方は、象徴するものと、象徴されるもの（キリスト）とを同一視しないかぎり反カトリック的である。しかしウェスレーが、両者の関係を全く否定していないかぎり反ツウイングリー的であると言えよう。

『ウェスレー兄弟の聖餐賛美歌』（The Eucharistic Hymns of John and Charles Wesley）を書いたラテンベリーは、キリストの現存によって聖餐が成り立つと言われる場合のすぐれて人格的意味合いが重要であり、この点に関しては、ウェスレーがルターよりも、カルヴィンの手段主義に近くあったと指摘している。

カルヴィンの聖餐論とは、キリストの体が天において父の右にあり、ただ聖霊によってのみ、キリストはその完全な形において臨在されるという考え方である。

2. 回心をうながす聖餐

ウェスレーの場合、キリストが聖餐において臨在するという事実は、体験的に確証されると考えていたので、聖餐は「たえざる回心をうながす神の定め（Converting Ordinance）」と説いている。そして聖餐は、信仰による回心を促すとともに、いまだ自覚的な信仰を言い表していない幼児洗礼（Infant Baptism）に対しても救いに至る信仰を伝達するものであることを認めている。たとえ幼児であっても（幼児洗礼受洗者）、神の恵みを心から欲し、キリストへの信仰をもって、主の食卓に行くならば、彼はその準備と志により、喜びの祝宴に招き入れられるだろうと考えていた。

しかし、ウェスレーが未受洗者の陪餐を許可したことを裏づけるものは、今のところ何も見つかっていない。

回心をうながすサクラメント（礼典）としての聖餐の意義が説かれ、又、幼

児洗礼を受けた者が適切な教育的配慮のもとに聖餐にあずかることが出来るということも、ウェスレーの場合には、積極的に肯定されている。

すなわち、ウェスレーの場合には、ルターやカルヴィンと比較して、聖霊と礼典との関係について信仰体験を軸として、より自由に、力動的に捉えられていると考えてもよいと思われる。

ジャン・クランメル氏（1932～現在）は、ウェスレーの聖餐観について「聖餐は信仰を強める礼典であるばかりでなく、回心をうながす礼典であったので、悔改をなし、神の意志を求め、これを行おうと欲しているすべての人々があずかることを許した」と理解している。

聖餐と洗礼（バプテスマ）との関係についてもここで少し触れておきたい。ウェスレーは、英国国教会（Anglican Church）のバプテスマによる再生の説教を肯定している。この点について、彼は「バプテスマの説について」（1756年）の中で次のように語っている。「バプテスマこそ、われわれの義認のための通常の手段であり、その水によって、原罪の罪責が洗われ、われわれは再生するのである」と述べている。しかし彼はまた説教「新生」の中で、バプテスマと新生とを区別している。彼にとり主要な関心事は、聖霊の内住による「内的なバプテスマ」の問題であった。これが外的なバプテスマによる罪の洗いと同時に起こるかもしれないし、又、起こらないかもしれないのであると理解していた。

3. 『礼典から見たジョン・ウェスレー』

O・E・ボーガン氏が『礼典から見た—ジョン・ウェスレー、神学的研究—』という題の研究書を1972年に出版した。この書物は、ウェスレーの礼典観と實際を、彼の教理的コンテクストの中に位置づけ、それを16世紀の神学的コンテクストと関連させて、論じている。この書物は、ウェスレー自身の著作と、彼が用いた17世紀、18世紀の神学的文献を徹底的に研究して、書かれたもので、極めて貴重な研究書である。

この書物によれば、ウェスレーの神学は、「救済の秩序」の神学として、す

べてを救済論の観点から理解している。すなわち、キリストの贖罪に於ける神の業、これに対する人間の応答と両者の相互関係に彼の関心があった。したがってウェスレーの救済論では贖罪、キリストの生涯、死、犠牲がその中心をなしている。贖罪は、歴史のある時点で1回限り起こった出来事ではなく、「その力は前にも後にも広がり、未来とともに、過去の罪をもすべて覆うので、永遠の今を意味する」と、ボーガン氏は結論づけている。

要するに、ウェスレーの救済の秩序とは、神がどのようにして人間に恵みを与えるのかを重層的に理解するものである。すなわち神の恵みは先行の罪を自覚させる恵み、義認の恵み、そして聖化の恵み、キリスト者の完全と言い、自覚的信仰の成長と成熟をみていると思われる。

この神の恵みを、神が人間に伝達する通常の媒介が、恵みの手段であり、礼典であると理解している。

ボーガン氏によれば、ウェスレーの礼典論は聖餐の3つの側面を強調している。第1の側面は「しるし、或いは記念としての聖餐」である。聖餐は、過去のキリストの苦難と犠牲を表している。したがって聖餐のその効果は、私たちの罪を贖い、永遠のいのちを獲得してくださったキリストの苦難を再び新たなものとして、生々しく私達の前に提示するということである。このように聖餐を記念として、ウェスレーが理解していたのであると、ボーガン氏は力説している。つまり、贖罪と聖餐は不可分に結びついている。

聖餐の第2の側面は、「キリストの贖罪の最初の実を私たちに与える恵みの手段である」ということである。つまり、聖餐は、私達が永遠の生命を受けるに適切な者となるために必要な恵みを伝達するということである。

聖餐の第3の側面は、「来るべき栄光を私達に確証するための保証ということ」である。つまり聖餐にあずかる恵みは、私達がそれに適切な者とされる時、キリストが私達のために獲得してくださったもの、すなわち、救済を神が確かに与えてくださるということ、私達が確証できることであると主張している。

以上の三つの側面をもう少し進めて述べるとジョン・ウェスレーの聖餐論の

特徴は、第1に記念としての理解である。つまり、キリストの苦難と死によってもたらされて、今も継続している救いを記念するものである。

第2に、恵みの手段としての聖餐という理解である。ウェスレーは彼の説教「恵みの手段」の中で次のように語っている。「このパンを食し、この杯から飲むことは、外的な見える手段ではないか。その手段によって、神はわれわれの魂の中にすべての霊的な恵み、義と平和と聖霊における喜びとを伝達されるのである。これらのものは、われわれのために、一度裂かれたキリストの体と、一度流されたキリストの血とによって獲得されたのである。それ故、真に神の恵みを望む者は、皆、あのパンを食し、あの杯から飲まなければならない」と記している。

また聖餐の目的については「その定められた目的は先行の義認の、或いは、聖化の恵みを、神が人々に伝達する通常の媒介である」と考えていた。したがって「神の恵みによって、死に至るまで、わたしはそのような意味で、それらの手段に信頼しよう。すなわち、神が約束されたものをすべて、また忠実に実行されると信じよう」と記している。

第3に、天国の約束としての聖餐という理解がある。ジャン・クランメル氏は「ウェスレー的な聖餐の体験と教養との中には、終末論的な面が存在した。初期のメソジスト教徒たちは、主の聖餐台における体験の中に永遠の生命が存在することを確認した」ことを指摘している。

野村誠氏によれば、ウェスレーの聖化論はバプテスマにより、人はキリストの肢体(Corpus Christ)とされる。そして、聖餐において人はキリストとの一致、結合が進められ、聖化、完全へと進んでいくことを力説している。更に、バプテスマによる新生は聖化へ進み、聖化が見神をその目的にもっている。そしてまた聖餐式において、キリスト者はキリストに出会い、キリストを見つつ変えられていくことを指摘している。事実、ウェスレーは聖餐における見神について次のように語っている。

「あのパンを食し、あの杯を飲むことによって、天の雲にのって、主が来られる時に至るまで、主の死を告げ知らせているかも知れない。いつれにしる、

これらはすべて神ご自身と出会うように定められた方法であるが、これらの方法によって、彼らは表現できない程の近い神への接近を見出すのである。彼らは、神を、いわば顔と顔とを相合わせて見、人がその友と語るように、神と語るのである。これは、上なるあの邸宅に入るための適当な準備である。そこでは、彼らはありのままの神のみ姿を見るであろう」と記している。

つまり、神の定められた聖餐に於いて、特に神を見るということについては、はっきりと語り、見神こそが神の国に入る準備として語られているのだと考えている。

そのうえで聖餐において、聖化が進められること、聖餐における見神から、人は聖餐において、神を見つめつつ、顔と顔を合わせながら、神に似るものと変えられていくと、ウェスレーは考えていたのである。なお、ウェスレーの聖餐式に於ける見神について、ジョンとチャールズ・ウェスレーによって書かれた『主の晩餐に関する賛美歌』をみると、全部で 166 篇あり、そのうち見神について 57 篇が言及している。

ジョン・ウェスレーはただ、信仰によるキリスト者の完全を力説し、聖霊の働きによる生活の潔めを強調したのである。そして同時に、聖餐を重んじていたことは明らかである。したがってメソジスト信仰復興運動は同時に礼典復興運動 (Liturgical Movement) でもあった、という見方をする人たちも居る。たとえば、ウェスレー研究者のラテンベリー、ポーマー等がこの立場であった。つまりジョン・ウェスレーを中心とする 18 世紀の信仰復興運動は福音的であるとともに、礼典的であったといえることができる。

4. 聖餐式の説教

ここにウェスレーの説教「常に聖餐式を受ける義務」について少し長いですが、その一部を紹介してみたい。

「できるかぎりしばしば主の聖餐を受けることが、キリスト者全部の義務であることをわたしは次に示そう。

そうすることがキリスト者全部の義務であるという第一の理由は、それがキリストの明白な命令であるということです。これがキリストの命令だということは、テキストの言葉、「わたしを記念するため、このように行ないなさい」から明白です。その命令によって、使徒たちが、かれらと共にこの聖なる事柄に加わっていた人々すべてに、感謝してパンを祝福し、裂き、与えねばならなかったように、キリスト者全部が感謝してキリストの体と血としてのしるしを受けねばならなかったのです。それ故に、ここでは、パンとぶどう酒は世の終りまで、かれの死の記念として受けとられるように命ぜられています。この命令はまた、わたしたちの主によって、ちょうど主がわたしたちのために命を捨てる時に、与えられたことにも注意して下さい。それ故に、この言葉は、いわば、すべて主に従う者への主の遺言なのであります。

キリスト者全部ができるかぎりしばしばこれを行なうべきだという第二の理由は、主への服従からそれを行なう者すべてには、それによる恵みが非常に大きくあるからです。すなわち、わたしたちの過去の罪のゆるしと、わたしたちの魂の現在の強化と更新とが与えられます。この世においては、わたしたちは決して誘惑から自由ではありません。わたしたちがどんな人生の道にしようとも、わたしたちの状態がどのようなものであろうとも、わたしたちが病気であるか、健康であるか、困難の中にいるか、安楽な状態におろうが、わたしたちの魂の敵はわたしたちを罪に導いて行こうとうかがっています。そうして、あまりにもしばしばかれらはわたしたちに勝ちます。さて、わたしたちが神に対して罪を犯してきたことを自覚する時、「主の死を告げる」こと以上に、御子の苦しみの故にわたしたちの罪すべてを抹殺するよう主に歎願すること以上に、わたしたちが主のゆるしを得るのに、どんな確かな道があるというのでしょうか。

そこにおいて与えられる神の恵みは、わたしたちに、わたしたちの罪のゆるしを確かなものにし、罪からはなれることを可能ならしめます。わたしたちの体がパンとぶどう酒によって強められるように、わたしたちの魂はキリストの体と血とのこれらのしるしによって強められます。これはわたしたちの魂の食

物です。すなわち、これはわたしたちの義務を遂行させる力を与え、わたしたちを完全へと導いて行きます。

それ故に、もしわたしたちがキリストの明白な命令を少しでも顧慮するならば、もしわたしたちがわたしたちの罪のゆるしを熱望するならば、もしわたしたちが神を愛し神に従うべく信じる力を願い求めるならば——わたしたちは主の聖餐を受ける機会を少しでも拒否すべきではありませんし、決して主がわたしたちのために備えられた祝宴に背を向けてはなりません。わたしたちが、この目的のために、神のよき摂理がわたしたちに与えるどんな機会もないがしろにしてはなりません。次のことが真の規則です。神がわれわれにその機会をあたえたもう、その度ごとにわれわれは受けるのが当然です。それ故に、すべてのものが備えられているのに受けなくて、聖なる食卓から出ていく者はだれでも、かれの義務を理解しないか、或いは、かれの救い主の死に臨んでの命令、かれの罪のゆるし、かれの魂の強化、そしてそれを栄光の希望で更新することを顧慮しないからです。

それ故に、少しでも神を喜ばせたいとの欲求と、かれ自身の魂への愛をもつ人全部に、初代キリスト者のように、できるかぎり度々聖餐を受けることによって神に従うように、また彼自身の魂の善を考えるように、させましょう。初代キリスト者にとっては、キリストの聖餐は主の日の礼拝の定まった一部でありました。数世紀の間、彼らはほとんど毎日それを受けました。すなわち、諸聖徒日はもちろんのこと、常に一週に四回受けました。従って、信者たちの祈りに加わるものは必ずその祝福された礼典に与ったのです。それに背を向ける者について、かれらがどんな意見をもっていたか、わたしたちは古代の宗規から学ぶことができます。「もし信者が信者たちの祈りに加わって、主の聖餐を受けずに帰るならば、かれを神の教会に混乱をもたらしたものとして破門せよ」。

主の聖餐の本質を理解するためには、次の個所を注意ぶかく読むのが有益でしょう。すなわち、その制定について語っているところの福音書とコリント人への第一の手紙のあの節です。ここから、わたしたちは次のことを学ぶ。この

礼典の目的は、内的な恵み、すなわち、キリストの体と血との外的なしるしであるところのパンを食べ、ぶどう酒を飲むことによって、キリストの死を絶えず覚えることです。

時間が許すかぎり、これを受けようとする者が自己吟味と祈りによってこの厳粛な儀式に自らを備えることは非常によいことです。しかし、これが絶対的に必要であるわけではありません。もしわれわれにその準備をする時間のない時は、絶対に必要であるところの習慣的な準備をするように心がけねばなりません。その習慣的準備というのはいかなる理由によってもどのような場合においても、しないでおくことが、決してできないところのものことです。すなわち、まず第一に、神のすべての戒めを守ろうとの全き決意を心の中にもつことです。第二に神のすべての約束をうけいれようとの真面目な欲求です」。説教「常に聖餐式を受ける義務」(W. VII. 147 — 49) 野呂芳男他訳『ウェスレーの神学』1960年、新教出版社

おわりに

ウェスレーは彼の伝道・信仰復興運動に参加した会員に対して、つとめて英国国教会で聖餐にあずかるように勧めていたのである。したがって彼の聖餐の神学的理解の基本に英国国教会の立場があったと考えることが出来よう。しかしカトリック教会の化体説に反対し、又、ツウイングリーの記念説やルターの共在説にも必ずしも同意していなかったのである。ウェスレーは聖餐に於ける一切の魔術的要素とともに単なる形式的主義をすべて排除し、ただキリストの臨在を主張したのである。信仰をもって聖餐にあずかるとき、私たちはキリストの臨在に触れ、キリストの贖罪の恵みを与えられると考えた。したがって聖餐の恵みに与えることにより、信仰は確立され、信仰から離れていた者も悔い改めに導かれるのであるとした。母親のスザンナは、聖餐により、悔い改めを実際に体験したことを述懐している。あらためて聖餐が悔い改めに導く礼典 (converting ordinance) であるという意義をウェスレーから新たに学びたいと思う。

参考文献

1. Jackson, J (ed.); The work of John Wesley, London, 1872
2. 野呂芳男他訳『ウェスレー著作集』(説教) 上中下 新教出版社 1961年、1963年、1972年
3. 野呂芳男他訳『ウェスレー著作集』(神学論文) 上下 新教出版社 1967年、1973年
4. 野呂芳男『ウェスレーの神学』新教出版社 1960年
5. Bowmer, John C.; The Lord's Supper in Early Methodism 1791. London; Dacre Press.
6. Bowmer, John C.; The Sacrament of the Lord's Supper in Early Methodism. London; Dacre Press.
7. Borgen. Ole E.; John Wesley on the Sacraments, Zurich 1972.
8. J. E Rattenbery; The Eucharistic Hymns of John and Charles Wesley, London: Epworth, 1948
9. William Colin; John Wesley's Theology Today, London; Epworth, 1960
10. 野呂芳男『ウェスレー』日本基督教団出版局 1963年
11. 野呂芳男『ウェスレーの生涯と神学』日本基督教団出版局 1975年
12. カルヴァン, J、『キリスト教綱要 VI/2』渡辺信夫訳 新教出版社 1975年
13. 佐藤敏夫『プロテスタンティズムになぜ聖餐は必要か』新教出版社 1996年
14. 野村誠『聖餐論』シオン書房 1989年
15. ジャン W. クランメル『礼典から見たジョン・ウェスレー神学的研究』銀座教会 1977年
16. 信條集(後篇) 新教出版社 1957年 キリスト教古典双書刊行委員会
17. メソジスト宗教個条(1784年) 新教出版社
18. Frank Baker; (Edited) The works of John Wesley vol25. letters 1721-1739 / 母親ズザンナの手紙
19. 野村誠『初期メソジズムの本質—ジョン・ウェスレーにおける聖化と聖化光』造本新教出版社 1978年